
人類の・・・

雨月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人類の・・・

【著者名】

NO837C

【作者名】

雨月

【あらすじ】

少年の夢は大きい。彼の夢は”人類の敵”である。今のところやんなことをしている気配は無いのだが・・・どうだうか？

(前書き)

さて、久しぶりの短編です。連載できると思つ方はおっしゃつてくれるとうれしいです。因みに、ある程度は続きを考えてているのですが連載をするかどうかは未定です。

一、

世の中には不得て不手とするものもあり、それをもたないものもある。

そして、同じように世の中には世の中が何気に面白ないと感じる人と面白くないと感じる人もいる。この主人公は後者のほう・・・つまり、世の中を面白くないと思っている人物で、特別な家系に生まれた少年であった。彼の将来の夢は“全人類の敵になること！！”である。しかし、世の中には例外と詰つものあり、前に記したとおり・・・得て不得手があるものだ。

少年は目覚め、今日も世界の敵になることを誓った・・・心の中で。

「・・・・よし、今日も一日がんばるぞ！」

決意改め少年は窓を開けて空気の入れ替えをし、飛んでいく鳥を眺めた。こんなことをいつまでもしてはいたつて世界の敵にはなれないかもしない。

「兄貴！朝ごはんできたよっ！…」

いつものように彼の義妹はうるやく扉を開けて侵入し、朝食を告げるのだった。少年はそのことを嫌つており、

「畜！そんなことをしたつて俺はうるさいだけだ！！」

といつてやるつもりなのだが今日も・・・

「あ、そうなんだ・・・まあ、朝早くだからもう少しだけ静かに言つてくれない？」

というしょぼいものに収まるのであった。因みに、彼が義妹の兄貴になつた一年後ぐらいからそのようなことを思い始めていたのだがそんなことをいつたことはこれまで一度も無い。

「うん！今日も私が作つたんだあ！！」

毎日母親は朝食なんて取らずに家を出て行くので当然のように残

つた者達が作ることになっていた。そして、近頃はずつと彼の義妹さんが料理を作っている。兄貴にお褒めの言葉をもらうためである。

「何？そんなの当然だろ！俺だって家事はやつてるんだ…！」

少年は確かにそんなことを思つてゐることもあるのだが自分では料理を作ることが出来ないのでそれは思ひ切らなければいけないことだといつも思つており、言うのだった。

「そうか…それなら楽しみだよ。」

そして、彼は夢が“全人類の敵”なのでこうも付け加える。

「今度、料理を僕に教えてくれないかな？ほら、独り立ちしたら自炊しないといけないからね。」

当然、夢をかなえるためにはまずは独りから始まるものだ。とりあえず飯を食わなくてははじめられないのだ。しかし、義妹はそれを許さない。

「教えないよう！教えたら兄貴、すぐに独り立ちしちゃうもん…！」

「むう、さすが我が義妹…兄貴の考え方などお見通しか…。」
完璧に勘違いをするような性格で、脇が甘い。更に付け加えるならこの少年は人をめつたに疑わないのだ。騙されたことにも気がつかない。はつきりいつて実現できそうに無い夢は寝てているときに見たほうがいいのではないかとお勧めする。

「今日の朝食はねえ…目玉焼きとお魚さんなんだよっ…」

「おいおい、高校一年生にもなつて“お魚さん”はどうかと思つぞ？それに俺、お魚さんは嫌いだ！！絶対に食わん…！」

と彼は言つことが出来ない。消極的な性格なのだ。

「あ～そりなんだ…僕、魚はちょっと…。」

「大丈夫！私が食べさせてあげるから…！」

「…わかったよ。自分で食べれるから…。」

じつして、少年は今日もこつこつ自分の夢に向かつて休み休み歩いて田舎していくのだった。彼が夢をかなえる日は来ないと思われる。

「…おいしい？」

「ああ？」こんなのできて当然だ！…」

朝の朝食・・・勿論彼はそんなことをいえない・・・というより、相手を傷つけるような言葉は絶対に言わない。性格上、そういう性格なのだ。

「うん、おいしいよ。」

「わあ・・・よかつたあ。」

なんともまあ、駄目な“全人類の敵”だ。くだらないな。そんな彼も高校一年生。去年までは真新しい学ランとかばんを引っさげて学校に通つており、今でも特に変わらない。変わったものはクラスと勉強の中身ぐらいいだ。苦手科目の数学が今年も彼に牙をむくだろう・・・中間テストなんて嫌いだと彼は常に心の中で叫んでいる。

「じゃ、行つてきます。」

「お父さん、いつてきまーす！…」

彼らは朝の儀式のように写真の人となつた父親に挨拶をする。彼の父親は変わつた一族の末裔で少年もその運命と言つかなんと言つかそんなものを受け継いでいた。

この世界はおかしい。だが、中から見ている分にはおかしくないのだ。年がら年中、桜吹雪が起つており、毎日お花見ができる。どこから降つてくるのかもわからない花吹雪に誰も疑問を抱かない。そして、この世界は普通なのだがおかしいところがある。

「や、今田も仲良く登校かな？」

「あ、剣治・・まあ、義妹を学校に連れて行く」とぐらいで出来るよ。

「そういう意味で言つたんじゃないんだけどね？まあ、それはいいとして平和で何よりだ。」

「む、私はもつと兄貴と・・・。」

この世界はどこかおかしい・・・・・といつても、めりやくりやだつた。

気がつけば怪獣が町を歩いていたり・・・・得体の知れない何かが犯罪を犯したりといった事があるのだ。神様がいるのなら完璧に適

当に作り上げた世界だと決定付けても構わないだろう。どこからも文句は出ないかと思われる。出たとしてもこれだけのおかしいことを突きつけられたら間違いなく裁判で勝てる。

「つおらー！なんじやーおぬしはー！」

「ぶあああ？なめとんのか、おんどりやあ？」

高校へと向かう途中、彼らは口げんか（既に殴り合いを開始している。）をしている学生を見た。どちらも筋骨逞しく、見た目高校生には見えない。

「全く、悪い世の中だ。」

「・・・ 蕉、剣冶・・・ 先に学校行つてて。」

「また・・・ 兄貴、怪我して帰つてくるんじやないの？？」

「大丈夫だよ。」

「蕉君、君の兄貴の事を信頼してあげなよ？」

「・・・ わかつた。」

少年は二人にかばんを預けてその喧嘩している一人に歩み寄った。「・・・ 高校生にもなつて朝つぱらから喧嘩をするのはどうかと思うよ？」

「おおん？おどりやのめはくさつとんのか？」

「わしらは中学生じや、ぼけえーー！」

「・・・ 失礼。」

少年は自分より頭一個分ほどでかい相手に頭を下げた。少年の背が低いわけではない彼はだいたい百七十センチぐらいはある。「おどりや、邪魔した覚悟はできとるさかないなあ？」

「覚悟、せいやああ？」

「・・・ 君たちは誰かを傷つけて楽しいかい？僕は嫌だね。」

「おおん？正義の味方、きどつとんのか？」

「力こそが正義じや、ぼけええ！」

なんともまあ、おかしい連中である。それを平然と見ている少年もおかしいのだが・・・

それから十分後、そこには一人の中学生が仲良く気絶していた。

「・・・全く、はじめから仲良くなればいいのに。」

彼らの体は濡れており、それを見下ろしていた少年のじぶしも濡れていた。彼は、その水をふき取ると走り出した。

「・・・遅刻かな？」

そう呟いた少年の耳に遠くから気の抜ける学校のチャイムが聞こえたのだった。そして、少年はその後も“人類の敵”を目指しながらも人助けをしながら学校に向かい、先生に叱られたのであった。そして彼は思う・・・

「よし、明日は先生に嘘をついていないことを証明するために助けたおばあさんを悪いけどつれてこよう。」

嘘をつけばいいのに・・・いや、その前に困っているおばあさんを見捨てて学校にくれば遅刻もしないのに彼はそんなことを考えないであつた。彼が目指すのは当然、悪役だ。だが、彼はまっすぐな性格なのである。そんな彼の名前は村雨むらあめ時雨じごれ。その名前をイニシヤルで呼ばれまくって中学生の頃にからかわれたこともあるのであつた・・・。

「・・・今日の宿題は“夢”という作文か・・・よし、正直に夢を書こう！」

いひして、その次も彼は先生に叱られるのであつた。終

(後書き)

どうだったでしょうか？主人公の名前が使い古されているだとか、友達の名前がこれまたどつかできいたことのあるようなやつだとか気にしないでください。ええ、彼のお父さんが死んだことも連載するようなことがあつたら書きたいと思います。では、失礼しますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0837c/>

人類の・・・・

2010年10月8日15時03分発行